



## 「教育」— 私を勇気づけてきた ラッセルと漱石の言葉



山岡育英会 選考委員

吉田 英生

本誌に初めて寄稿しますので、教育に関して私が学生時代から反すうしてきた文章をご紹介しますと思います。私が知るかぎり教育に関するもっとも重要で明確で美しい英文の一つは、英国の有名な哲学者バートランド・ラッセルが米国の13歳の少年に返答した手紙(1962年3月26日付)の中の一文ではないかと思っています。手紙は約50年前、その手紙をおさめた本の発行も40年以上前ですから、今ではほとんど知る人もない一文ですので、少し長くなりますが原文で引用しましょう。

I believe that the main object of education should be to encourage the young to question and to doubt those things which have been taken for granted. What is important is independence of mind. What is bad in education is the unwillingness to permit students to challenge those views which are accepted and those people who are in power. It is necessary for new ideas to emerge, that young people have every encouragement to fundamentally disagree with the stupidities of their day. Most people who are respectable, and most ideas which are considered to be fundamental are barriers to human achievement. I feel that it is not as important to learn large numbers of things as it is to feel passionately that one has the right to disagree and the obligation to develop new ideas.

*(Dear Bertrand Russell, a selection of his correspondence with the general public 1950-1968, George Allen and Unwin 1969)*

内容についてはまずい日本語で追加する必要もないと思いますので、私がこの文章に出会った背景を説明します。私が大学3年生だった1976年当時、「拝啓バートランド・ラッセル様(講談社、1970)」という訳本中の数々の文章に感激して、ぜひとも原文でも読みたいと願い、大手書店経由で注文しました。インターネットで何でも検索できてさらに電子ファイルまで一瞬で入手できる現代とは異なり、書店で電話帳(これ自体が今や過去のものです)のような分厚い洋書リストから出版情報を探し出して注文するのです。そして船便で4ヶ月以上待つ原著に出会えたときの感激は今でも忘れることができません。

その原著の中でも、上に引用しました文章は私が教育の原点を考えるとときにいつも頭に思い浮かんで、漱石の「坊っちゃん」にある山嵐の言葉

教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思います。

とともに、自分を勇気づけてきてくれたのです。